

手紙 I

私の弦きは虚無だ
それらに構築される詩は虚構だ
時に薬物が教えてくれる方程式のそれだ

解答はある
それは
虚数と実数の間に反響、反射する音と色で示される

それらの音だけで奏でられる音楽
それらの色だけで描かれる絵画
そんな詩を私は書きたい

「時間の外にこそ、大切な何かを産み落とすべきだ」
そう言った 遠い街に住む詩友よ

私は 移りゆく心象の色合いを
いつか このペンで指揮してみたいのだ

詩人 J へ